

## サンパウロで出会った「お金の女王」

神戸大学経済経営研究所

教授 浜口 伸明

今年の2月に出張でサンパウロを訪れた時のことです。お招きいただいたある日系ブラジル人の友人の家で、「ちょっとお願いがあるんだけど」と、ためらいながら友人が私に見せたのは、50枚以上もある古い日本の百円紙幣でした。彼の知り合いが家の倉庫を整理していたらこれを発見したので、「珍しいものかどうか調べてくれないか」とのこと。訊くと、持ち主は少しお金に困っていて、日本のコインショップに持ち込めば高く売れるのではないかと思っているようでした。

私にとっては、地球の裏側まで来てこんな珍品に出会うとは思っていませんから、持ち主の関心はそっちのけで、じっくり観察してみることにしました。実は私の目を引いたのは肖像画でした。表には右に聖徳太子と左に法隆寺夢殿、中央上に菊の紋章が配され、裏返すと中央に法隆寺の遠景が描かれています。聖徳太子といえば、私が大学生のころまで1万円といえばこの人で、貧乏学生にとってどれほど神々しく愛おしい存在であったか。

表記を見ると、「日本銀行兌換券」、「此券引換に金貨百円相渡可申候」(円は旧字)、「大日本帝国政府内閣印刷局製造」となっていますから、どうやらこれらは戦前の金本位制の時代に発行されたもののようです。日本の金本位制は、第1次世界大戦以前を除くと浜口雄幸内閣が1930年に金解禁を行って、翌年犬養毅内閣の下で金輸出が再禁止されるまでのごく短い間ですから、発行された時期はかなり限定されます。

さっそく日本の金融史が専門の当研究所の鎮目雅人教授にメールで相談すると、1930年1月から発行が開始された「乙百円券」であるとの回答をいただきました。金本位制から管理通貨制に戻った後も、同じ図柄で非兌換券として発行され続け、戦後インフレの最中の1946年3月に他の多くの戦前発行のお札とともに通用が停止されたそうです。また、聖徳太子がお札の図案になったのはこれが初めてのようです。結局、保存状態が評価できなかったこともあって、この紙幣のコレクターにとっての時価を教えてあげることができませんでしたが、紙幣がどのようなものであるかを伝えて友人には納得していただきました。

さて、持ち主の日系人家族にとっては倉庫の隅に眠っていたガラクタ同然の札束ですが、私はそれからしばらくの間、これを日本からトランクにつめて持ってきて後生大事に保管していた移住者一世にとってはどのようなお金だったのかについて思いをめぐらせることになりました。鎮目教授によると、1930年当時の百円の現在価値は、卸売物価で換算すると7万円くらい、消費者物価では20万円くらいになるそうです。これが50枚以上もあ

ったとすれば、移住した一世にとってはただならぬ大金であったはずですが。そうすると、当時の記録によくあるように、ブラジルで一旗挙げようと、日本で田畑を売って持ってきたのかもしれませんが。当時はこれをブラジルのお金に交換するような為替も発達していなかったでしょうから、いつか故郷に錦を飾る日のためにしまっておいたのに、日本では紙くず同然になってしまったとしたらその無念さたるや…。まあ、あくまでも私の空想にすぎませんが。

ちなみに、この札については太宰治が昭和 21 年に発表した『貨幣』という短編小説でとりあげています。それによると、このお札ができたころには「お金の女王」で、当時これを手にした大工のおかみさんがその百円で質入していた着物 10 枚を取り返し、その後、医学生が顕微鏡を質草にしてこの百円を借り出したというほど値打ちのあるものであったようですが、戦時中には「休むひまもなくあの人の手から、この人の手と、まるでリレー競走のバトンみたいに目まぐるしく渡り歩き、おかげでこのような皺（しわ）くちやの姿になった」と、インフレで価値が暴落した様が描かれています。

私があのお札束をただならぬ大金だったのでと想像したのは、しわくちやになる前の「女王」らしいきれいな状態であったからです。もしそうだとすると、あのお札束はお金目当てで売るよりも、一族がブラジルに根付くきっかけをつくった先祖の記念に神棚に上げておくほうがふさわしいと思うのですが、3 世、4 世の世代ともなると、先祖の苦勞もすっかり風化しているのかもしれませんが。

来年、2008 年 4 月 28 日。最初の日本人ブラジル移民 781 人を乗せた笠戸丸が神戸港を出航してから百年になります。